

あいおい まつ
相生の松
(緒川)

江戸時代のことです。緒川村本郷の下切地区の者が寄り集まって、村の西方の山地を切り開いて新田を作ること話し合いました。

そこで、まずこの計画に賛同した七名の者が、山の中に小屋を建てて移り住み、開墾を始めることになりました。その中に、村の若い衆の長九郎も加わっていました。

「うちは、お前に譲る田も畑もねえ、根っからの小作人だ。お前、やる気があったら行って

みんか。」

区の寄り合いから帰った父に新田づくり話を

を聞かされた長九郎は、とつきにおたねのことを

を考えた。おたねは、嫁にもらうならこの

人と、長九郎がはやくから決めた村の娘でした。

おたねのほうも、いまは、まだ幼い弟のめん

どうをみななければならないが、やがては、長九郎

さんのところへと、心に決めていました。二人

は、親にも、村人にも認められた相愛の仲だった

のです。

「新田が出来て、わたしを迎えてくれるまでは



待ちますわ。」
ことば はげ
けなげなおたねの言葉に励まされて、
ちようくろう
長九郎は、

しんでん なかま くわ
新田づくりの仲間に加わったのです。

いよいよ出発の日の朝早く、
しゅっぱつ ひ あさはや
ちようくろう
長九郎は黒松の

なえ あかまつ なえ も
苗を、おたねは赤松の苗を持って、
しんでん みち
新田への道

を急ぎました。そして、ちようどその中ほどの
いそ なか

ところの道端に、二株寄せ合って植えました。
みちばた ふたかぶよ あ
う

ふたり
二人は、ここを逢いびきの場所と決めたのです。
あい ばしよ き

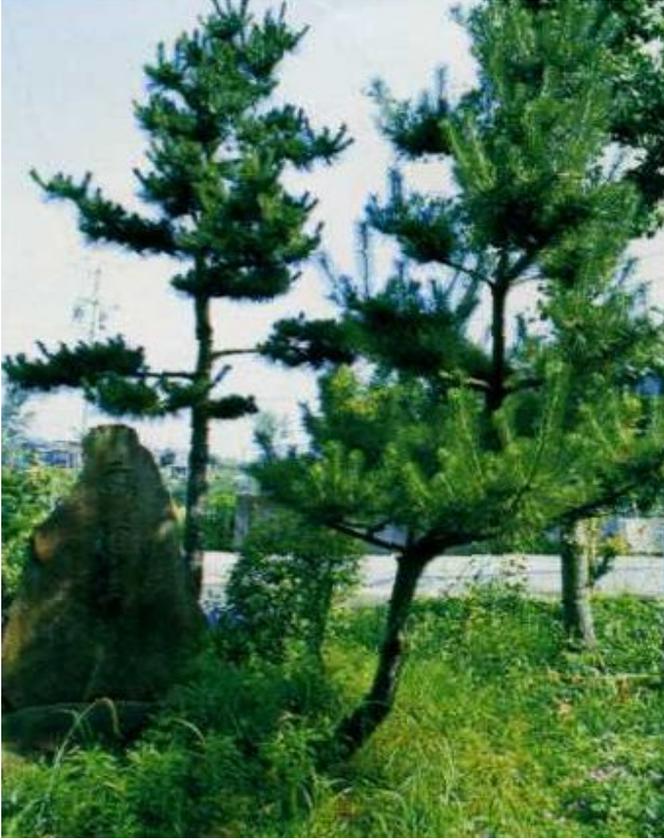
やがて、新田は立派に開かれ、
しんでん りっぱ ひら
ちようくろう
長九郎とおた

ねは、めでたく結婚しました。二人の植えた松
けっこん ふたり う まつ

もお
も大きくなり、だれ言うもなく、「相生の松」と
あいおい まつ

よ
呼ばれるようになりました。そして、新田から
しんでん

おがわ いちりはん みち
緒川への一理半の道のりの半ばのめじるしとき
なか



▲ 相生の松

れました。夏の暑い日など、涼しい木陰を作つ
ていて、一服の場所ともなりました。しかし、
この松は枯れてしまい、今では後に植えられた
松が育っています。